

新たに発見された中世の土留め遺構

もうひとつの大工事

橋脚の北側で発見されたもので、角柱6本と厚板2枚、それに大きな礫で構築されています。東西方向に約13mを測りますが、さらに調査区外に延びており全容は明らかではありません。その形態から川岸の土留め(護岸)などのために造られた可能性が強く、橋を架けた時と同じか少し新しい時代のものと推測されます。



土留め遺構全景【南から】



厚板東側【南から】



角柱3と厚板西側【西から】



角柱6とかすがい【東から】

こちらも巨大な木材です

厚板は厚さ10cm、幅約1m、長さは西側が7m20cm以上、東側が5m10cm以上ある一枚の大きな板です。立てた板を角柱でさえ、川岸が崩れるのを防いだのでしょう。大きな礫も同じ目的で板の北側全体に積まれていると思われます。



角柱4・5間の礫積み【南西から】

